令和3年度目標達成シート

基本方針

「次期指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し、江戸東京の歴史と文化の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」（Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館）を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の総合派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2) 東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として捉え積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 両国・深川地域の文化施設、区、関連機関等との連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	H30年度実績値	H31年度実績値	R2年度実績値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実績値
観覧者数（人）	1,326,550	1,132,272	376,009	〈1,230,000〉	486,600 〈☆427,272〉	420,254
自主事業参加者数	92,053	84,437	25,541		50,000	37,324
HPアクセス件	6,528,662	7,303,328	5069646			6,077,768
デジタルミュージアム（公開資料画像数）	28,476	29,090	51,745			15,783

※R3年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段〈☆〉が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

令和3年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

1

資料：歴史と文化の〈継承〉
●江戸東京の歴史と文化を国内外に発信できる資料の収集を行うとともに、「江戸博コレクション」を適切に管理保管する。
●デジタル・アーカイブ構築の準備をはじめとし、収蔵資料の公開に向けて、資料データの整備を促進する。
●大規模改修工事の準備のため、外部倉庫への資料移送を着実に実施する。

●学芸員の地道な調査活動により、コレクションの価値を高める収集活動ができた。活動を続けるための人材育成が課題である。
●およそ4万7000点の資料情報を確認し公開に備えた。全点公開に向けさらなる体制整備が必要である。
●およそ7万7000点の資料を外部倉庫に移送。残り15パーセントの資料を安全に輸送し、確実に資料を保存管理するための環境整備が必要である。

評価指標：デジタルミュージアムの公開画像点数
公開画像点数　15，783点

2

展示：歴史と文化の〈発信〉
●「江戸博コレクション」を最大限に活用した常設展示を運営し、さらに、江戸博のミッションを具現化する企画展を開催する。
●東京2020大会に際し、カルチュラル・オリンピアードを念頭に置き、東京のフラッグミュージアムとして質の高い特別展を開催する。

●常時2,000点に及ぶ常設展示を維持するとともに、新規収蔵品や通史、徳川将軍家などを取り上げた企画展示を行い好評を得た。しかし感染症流行の影響で来館者は大きく伸び悩んだ。
●オリンピック期間中に相撲と江戸文化に関する企画展を実施して五輪大会盛り上げに貢献した。休館となる今後も時宜にかなった事業を展開できる体制を維持したい。

評価指標：観覧者数
観覧者数　420，254人

3

教育：歴史と文化の〈学舎〉
●教育普及事業のなかでも、特に子供・高齢者・障害者・外国人に向けた館独自のプログラムを開発し、実施する。
●大規模改修工事中の本格実施に向けて、アウトリーチの試行を積み重ねる。

●感染症流行に際し、短時間のワークショップや動画コンテンツ公開を行い、学びの機会の確保につとめた。これらの更なる充実が望まれる。
●感染症流行の影響を受け、十分なアウトリーチはかなわなかったが、学校等との意見交換を進め、今後の活動に備えた。本格実施に向け工夫を重ねたい。

評価指標：教育普及事業の実施回数
実施回数　86回

4

運営：歴史と文化の〈拠点〉
●「来館者」「館スタッフ」「博物館資料」の安全確保を第一に、特に「危機管理」を最優先の課題として取り組む。
●ショップやレストランをはじめ、あらゆるミュージアム・シーンにおいて、来館者の心に残るような行き届いたサービスを提供する。
●綿密な広報戦略を展開し、江戸東京の歴史と文化を国内外に幅広く発信する。

●委託事業者と館が、毎日の「夕礼」の場を活用して情報の共有化を励行し、日々の現場で起きる課題に迅速、かつ的確に対応することができた。また、案内、警備、施設管理をはじめ、レストランやショップなども加えたすべての構成メンバーが、月に一度の「現場連絡会」に参画することによって、相互に「顔の見える」関係を構築し、良好な館運営につなげることができた。さらに災害時の一時滞在施設の運営や自衛消防隊の強化を図るため、委託事業者と館職員で構成する「江戸博防衛隊」会議を月一度実施した。
●SNSの情報発信に力を入れた結果、大幅にフォロー数が増加し館の活動を広くアピールできた。

評価指標：顧客満足度調査
総合満足度で、「満足」「どちらかといえば満足」の合計が98．5％（速報値）

5

研究：歴史と文化の〈究明〉
●「えどはくカルチャー」の実施や紀要、資料叢書などの刊行物をとおして、調査研究の成果を広く都民に還元する。江戸東京の歴史と文化の独自性を比較・検討するため、国内外の博物館等と連携し調査研究を行う。
●図書室の機能をさらに充実させ、都民が「江戸東京の歴史と文化」を学べる「入り口」とする。また、他機関との書誌情報検索システムの連携を密にし、検索機能を向上させ都民サービスを図る。

●館員の研究活動の成果を『紀要』『史料叢書』『調査報告書』の刊行物や「えどはくカルチャー」などに反映させ、江戸東京学の研究センターとして学術的役割を果たした。コロナウイルスの世界的蔓延により、国内外の機関との人的交流はできなかったが、出版物の交換など、研究成果の発信や情報収集を行った。
●司書による「江戸東京の歴史と文化」にかかわるレファレンスサービスの対応件数は、1年間で740件、OPAC検索実績452万4,912件に及んだ。国会図書館が運営するレファレンス協同データベース事業への貢献度の高さが認められ、顕彰されるなど、専門図書館としての社会的役割を着実に果たすことができた。

評価指標：刊行物の出版と図書室機能の充実（内容、件数ともに充実したレファレンス・サービスの提供）、カルチャー受講者の満足度
『紀要』『史料叢書』『調査報告書』を出版。国会図書館が運営するレファレンス協同データベース事業への貢献度の高さが認められ顕彰された。カルチャーのアンケート結果は、満足度ほぼ100％であった。

6

交流：歴史と文化の〈展開〉
●都民はもとより、世界各地からの人びとの来館を促すべく、江戸東京博物館の豊富な情報を広く深く発信する。
●江戸東京博物館を、両国→墨田→東京→日本の文化発信の拠点としてさらに定着させる。
●アジアや欧米の主要都市の博物館・美術館との文化交流、人的交流、展覧会をはじめ、さまざまな事業の実施をとおして促進する。

●19回目となる日中韓3カ国4館の国際シンポジウム、ならびにソウル歴史博物館で秋に開催予定の交流展「隅田川―江戸時代の都市風景」は、パンデミックのため延期となったが、再開に向けた準備を着実に実施した。
●スペイン・バルセロナで12月に開催された「ICOM」（国際博物館会議）の分科会「CAMOC」（都市博物館のコレクション・活動国際委員会）年次会議にオンラインで参加し、発表を行った。
●当館ならびに国立歴史民俗博物館が事務局館を務める「全国歴史民俗系博物館協議会」（歴民協）の総会を書面にて開催した。川崎市市民文化局からの依頼により、川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキュー支援の呼びかけを歴民協事務局から加盟館に行うとともに、連絡調整を行った。

評価指標：国際的なプレゼンスの向上（海外の研究者や研究機関との研究交流件数）
海外の14研究機関と研究成果物である『紀要』等の相互交換を行い、研究情報収集と発信を行った。

7

評価指標：

8

評価指標：

総合的な所見（自己評価の総評）

令和3年度も引き続く新型コロナウイルスの影響により、4月25日から5月31日まで休館を余儀なくされた。特別展「富嶽三十六景への挑戦　北斎と広重」展は、開幕2日目から休止となり、約1か月間の休止期間中、展覧会をオンラインで鑑賞できるようにVR（日英）で展示を見ることができるような手法を導入。緊急事態宣言下の東京2020大会にあわせて実施した「大江戸の華―武家の儀礼と商家の祭―」展においても同様にVR（日英）を制作し、世界に発信したことは、「江戸博コレクションの国際的価値を高める」という開催主旨にかなったものとなった。大会盛り上げ事業として実施した日本舞踊公演などは来日外国人へ日本の伝統文化をアピールできる機会とはならなかったが、このVRによって来日しなくても日本文化に接する機会を提供でき、関心を持ってもらうことにつながったと自負している。また初の試みとして、「縄文2021―東京に生きた縄文人―」展は、東京都埋蔵文化財センターと国立歴史民俗博物館の協力のもと、たてもの園と連動した展覧会として実施した。
コロナ禍前は、常設展示への来館者の約3割をインバウンドが占めていたが、外国人観光客の来館機会を喪失し、コロナ対応の一時休館も相まって、特に上半期の入館者数は厳しいものとなった。しかし、大規模改修のための長期休館のニュースがインターネットで報じられた後は、入館者が増え、休館を惜しむ声、再オープンを待ち望む声が多数寄せられた。コロナに翻弄された一年であったが、調査研究、資料収集などを着実に実施し、VR導入やたてもの園との連動など新たな試みも行った。この経験を今後の活動に反映していきたい。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

昨年度に引き続き、新型コロナウィルス感染症の拡大による影響があったため、目標通りの成果を上げるにはいたっていない点もみられるが、オンラインなどの力を借りて各事業いずれも所期の目的は達成できているものと考えられる。とりわけ、これまで観覧者に来てもらうことを前提としていたところ、特別展においてVR（日英）制作による世界への情報発信に取り組んだことは、関係者の努力成果として高く評価できる。また、本館とたてもの園が連携した「縄文2021ー東京に生きた縄文人ー」も新しい試みとして評価したい。
オンライン環境を中心とする情報発信は、来館できなかった利用者へのサービスのみならず、来館に至らない潜在的な利用者への効果的な情報提供につながったことは大きな成果である。リニューアル後のリアルな展示物を見る体験への呼び水として積極的に利用してよいと考える。そのために不可欠な所蔵資料情報のデジタル化・アーカイブ化も着実に進められつつある。今後は海外とのシンポジウムを同時配信する等、より周知・発信することにも努めていただきたい。
また、大規模改修工事の準備と平行して、東京2020大会対応・コロナ対策など危機管理に努め、事故無く、出来得る事業に取り組み最大限の成果を上げることができたことは、江戸博職員が博物館の社会的基盤としての重要性を共有できている証であると高く評価したい。
調査研究、資料の充実なども着実に実施したということなので、長期休館中の持続的な情報発信や、他施設への資料貸出をはじめとする協力・連携事業の充実とともに、リニューアル後の江戸博の更なる充実を期待したい。

【江戸東京たてもの園】

令和3年度目標達成シート

基本方針

「次期指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館および江戸東京たてもの園の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し、江戸東京の歴史と文化の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」(Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館)を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2)東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 多摩地域の文化施設、関連機関などとの連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	H30年度実績値	H31年度実績値	R2年度実績値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実績値
観覧者数（人）	256,202	229,663	100,771	＜250,000＞	175,000 〈☆ー〉	116,052
自主事業参加者数	8,329	5,455	0			0
HPアクセス件数	8,523,965	8,844,216	5,545,045			7,280,091
情景再現事業の入園者数・参加者数	67,112	41,760	8,811			6,529

※R3年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段〈☆〉が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

令和3年度達成目標 / 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

	令和3年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1	①資料：歴史と文化の〈継承〉 ●30棟の復元建造物に対し、長期保全計画に則り修繕を実施する。また、緊急修繕工事や日常の軽微な補修等を確実に遂行し、来園者の安全確保と文化財の保存管理を図る。 ●旧武蔵野郷土館所蔵資料に関し、適切な保存管理を継続する。また、「江戸博コレクション」の一部として、デジタルミュージアム化を推進する。 ●虫菌害、獣害などから復元建造物や収蔵資料を保護するため、状況に応じた対策を図る。	●復元建造物の長期保全計画による修繕工事を実施するとともに、部分劣化がみられた12棟の改修工事を行った。計画の確実な遂行とメンテナンスを行っていく。 ●収蔵資料の棚卸を計画通り遂行し、資料が確実に保管されていることを確認した。また、絵馬関係資料のデジタル撮影を実施し、分析を加えHP上にて公開した。 ●総合的有害生物管理（I.P.M）の手法に則り、適切な資料管理を施した。引き続き対策を施していく。
	評価指標　長期修繕計画に基づく修繕の実施状況	復元建造物4棟の修繕
2	②展示：歴史と文化の〈発信〉 ●復元建造物の展示では、季節感の演出など体感性の向上に努める。また、ホームページ等を活用した情報発信を推進する。 ●特別展示は東京2020大会開催に合わせ、話題性の高いテーマを設定、園のミッションを幅広く発信していく。 ●情景再現事業は、建造物の構造や機能を体感できるよう改善を重ね、園の特色を十分に活かす。	●復元建造物内にて季節感の演出を行い、SNS等で発信した。また、演示品の交換、清掃を行い、展示の品質保持に努めた。 ●2020東京大会に合わせ、「縄文2021」展を開催。収蔵品を活用するとともに、縄文住居を新規製作、YouTubeを活用したオンライン解説等を行い好評を得た。 ●感染症流行の影響で予定していた2事業を中止したが、実施した「紅葉とたてもののライトアップ」、「たてもの園でお正月」は共に盛況であった。次年度は通常通り実施したい。
	評価指標　令和3年度観覧者数	116，052人（4月1日～5月31日、1月12日～3月21日は感染症対策として全面休園）
3	③教育普及：歴史と文化の〈学舎〉 ●園の代表的な教育普及事業である「昔くらし体験」を確実に遂行すると共に、これを外国人、障害者、家族・小グループ等の来園者属性に合わせアレンジした事業の定着を図る。そのための環境整備を検討する。 ●ホームページ上に様々な学齢に応じた学習プログラムを掲載、オンライン事業を展開する。	●学校団体向けの「昔暮らし体験」は、感染症対策として短時間で実施できる形に変更して実施した。感染症流行下、他の属性の来園者にむけた事業は実施できなかったが、上記の取り組みをアレンジして実施する見通しをたてることができた。 ●ホームページ上の「えどまる広場」にて各種コンテンツの充実を図った。
	評価指標　教育普及事業の参加者数	昔くらし体験参加者数：505名、えどまる広場コンテンツ拡充：17件
4	④運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」の安全確保を第一に、「危機管理」を最優先の課題として取り組む。 ●ショップやレストランをはじめ、あらゆるミュージアムシーンにおいて、来園者の心に残るような行き届いたサービスを提供する。	●感染症対策を最重要課題に掲げ、事前予約制や赤外線センサーによる検温等の各種方策を整え、園内でのクラスター発生を防ぐことができた。その他2020東京大会期間における警備の拡充、防災マニュアルの改訂準備など危機管理の水準向上に努めた。 ●臨時休館を行う中で、テナントの努力によってサービスの維持が図られた。
	評価指標　顧客満足度	総合満足度：98.5%（満足80.0%、どちらかといえば満足18.5%）
5	⑤研究：歴史と文化の〈究明〉 ●復元建造物の展示や解説、「360度パノラマビュー」を充実させるとともに、建築の専門博物館としてふさわしい展覧会などを開催する。 ●旧武蔵野郷土館資料を活用した地域研究を進めるとともに、多摩地域唯一の都立文化施設として、失われつつある地域の有形無形の文化資源の調査研究を進める。	●「360度パノラマビュー」では、未公開部分の新規撮影や都電の内部撮影など、コンテンツ拡充の準備を整えた。次年度以降は園内通路部分の撮影を行う予定である。 ●旧武蔵野郷土館資料を活用した特別展を実施、館長主導で実験考古学的な考察を加えた竪穴式住居を制作、工程を含めて展示・デジタル図録にて広く成果を発信した。今後も同様の取り組みを続けたい。
	評価指標　研究成果の公開	特別展「縄文2021 ―縄文のくらしとたてもの―」デジタルパンフレット（図録）
6	⑥交流：歴史と文化の〈展開〉 ●小金井市をはじめとする関連諸団体と連携し、事業の実施及び広報の相互協力により、発信力の強化を図る。 ●多摩地域唯一の都立文化施設として、地域の博物館をはじめ広く国内外の野外博物館と連携し、地域の活性化に寄与する。また、オリンピック・パラリンピックムーブメントの一翼を担う。	●感染症の流行により、各所との連携の機会の多くが失われたが、小金井市や多摩地域の博物館との連絡協議会などへの参加を通じ、連携保持に努めた。 ●2020東京大会に連動した特別展を開催するとともに、東京都の風呂敷ワークショップの会場を提供し、大会盛り上げに貢献することができた。
	評価指標　地域等との交流実績	地域関係団体連絡会等の参加：8回、風呂敷ワークショップの協力：30日間
7		
	評価指標	
8		
	評価指標	

総合的な所見（自己評価の総評）

令和3年度は、昨年度に引き続く新型コロナウイルス感染症流行の影響で、約4か月の臨時休園を余儀なくされた。これに伴い、計画されていた一部の事業が中止となり、来園者数は目標を大きく下回った。顧客満足度に関しては肯定的評価が98.5パーセントにのぼり、前年度を上回った。理由として、事前予約制や狭小部の見学休止などの感染症対策への理解が浸透したと考えられる。各種事業については、公式ホームページ上での教育普及事業の展開をはじめとする、ウィズコロナを意識した工夫が定着した感がある。こうした中、東京都のベンチャー育成事業で、来園者の視線の向きで展示解説が流れるアプリケーションの開発に協力するなど、新たなサービスに向けた業務も実施することができた。アフターコロナを見据え、引き続き挑戦を続け、当園のミッション達成に努めていきたい。

外部評価 評定結果

B

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

当年度は前年から続くコロナ対応により長期の臨時休園を余儀なくされたが、再開後は他施設の見本となるような感染対策を実行しながら万全な形で利用者サービスに努めている様子が窺える。だからこそであるが、休園の措置は、東京都の方針であるとは言え、都の他施設や他の博物館施設のとった方法と比較して整合性があるものとは映らなかったこともある。これに対する一般利用者の意見やニーズについては十分把握しているとは思うが、今後の運営に役立ててもらいたい。一方、復元建物・諸設備・植栽のメンテナンスも高いレベルで行き届いている印象である。また、コロナ禍の対応を通じて、ボランティア活動の意義や重要性について、利用者の視点からも再確認できた一年であったかと思う。

【東京都写真美術館】

令和3年度目標達成シート

【資料3】

基本方針

東京都写真美術館は、日本で唯一の写真と映像を専門とする総合美術館として、写真・映像に関する文化の振興に寄与するため、平成7年1月に恵比寿ガーデンプレイスに開館致しました。

以降、当財団は、世界にも数少ない写真・映像の総合美術館の運営を担う団体として、「写真・映像とは何か」という根本的な問いに答える展覧会プログラムを組み立て、記録としての写真・映像や、芸術としての写真・映像、報道としての写真・映像など、写真・映像が持つ多様な性格や表現により、如何に人々に豊かさや潤いを与えていけるかを追求してまいりました。

今後も、写真と映像のセンター的役割を担う美術館として「存在感」を高めていくことを基本コンセプトに、ホスピタリティーの高い館運営を行ってまいります。

以下は、基本コンセプトを支える5つの美術館像と、当財団として取り組む重点目標であり、写真美術館はこれらを実現するため、質の高い展覧会はもとより、専門性に裏打ちされた多様な事業を展開することにより、東京の代表的文化施設の一つとして貢献し、その存在感を国内外に示してまいります。

〈基本コンセプト〉
我が国唯一の写真・映像の総合美術館として、センター的役割を担う「存在感のある美術館」を目指します。

〈5つの美術館像〉
① 質の高い写真・映像文化と出会う美術館
② 写真・映像文化の新たな創造を支援する美術館
③ 過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館
④ 写真・映像文化の拠点として貢献する美術館
⑤ 開かれた美術館

館の運営に当たっては、館の基本コンセプトである「存在感のある美術館」とこれを支える5つの美術館像を目指すとともに、財団総体で取り組む3つの重点目標を達成するため、以下の目標を設定し、毎年、進捗状況を管理しながら事業を進めてまいります。

とりわけ、写真・映像に係る技術の進展や、それに伴う社会生活や価値観の変化、新たな表現など、時代の動向を具に捉えながら事業展開に努めます。また、国内外に写真・映像の館の存在感を示すため、写真・映像を専門とする総合美術館としてこれまで培った専門性を発揮し、質を重視した展覧会を実施するとともに、保有する国内外の美術館や国際交流基金等のネットワークを活かした共同企画、SNS等の効果的な情報ツールを積極的に活用した戦略的広報を推進してまいります。

	H30年度実績値	H31年度実績値	R2年度実績値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実績値
観覧者数（人）	334,799	360,607	158,338	<380,000>	240,000 <☆225,000>	209,004
自主事業入場者数（人）	38,747	39,431	4,696		36,000	17,712
図書室利用者数（人）	28,015	25,475	1,966			10,268
支援会員法人数（法人）	252	244	230			222
HPアクセス件数	6,071,603	5,348,987	2,912,787			4,450,870
付帯事業収入（千円）	8,540	6,986	5,584			4,207

※R3年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段<☆>が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

	令和3年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1	『質の高さに磨きをかけた展覧会の開催』 国際動向や社会との関連等を踏まえた専門的調査研究に基づき、収蔵コレクションの有効活用を図りながら、質が高く、来館者それぞれが満足いただける展覧会を開催致します。		○会期を一部縮小し、19本の展覧会を開催した。重点収集作家個展や希少価値の高い初期写真展、旬のミドルキャリアの作家個展など、日頃の調査研究に基づく質の高い展覧会を開催するとともに、新たな鑑賞体験の提供として33件のオンラインコンテンツを制作した。また、感染症拡大防止に努めつつ、講演会等の対面イベントも実施し、リアルとオンライン双方による情報発信に努めた。
	評価指標	展覧会満足度	収蔵展・自主企画展　来館者満足度平均87.4%（大変良い・良い）
2	『将来性のある作家の発掘と創造活動の支援』 新進作家に対する作品発表の提供により、登竜門や跳躍台の役割を果たすとともに、作品鑑賞による刺激体験を通じて、作家や鑑賞者の文化創造活動を促進してまいります。		○日本の新進作家展、映像展、恵比寿映像祭などを通じて、写真・映像表現における新進作家の作品を紹介し、関連事業への出講等により作家・作品と来館者を結ぶ取り組みに努め、写真美術館発のアーティストの発掘に努めた。 ○当館での展覧会が契機となり、芸術選奨文部科学大臣賞新人賞、木村伊兵衛写真賞、写真の町東川賞を受賞した。
	評価指標	新進作家展に登用した作家の活躍（受賞件数、個展の開催件数、作品集の制作件数など）	山城知佳子（芸術選奨）、吉田志穂（木村伊兵衛写真賞）、宮崎学（第38回写真の町東川賞 飛弾野数右衛門賞）
3	『写真・映像文化の礎となる収蔵コレクションの充実・発信』 貴重な作品を的確に収集・保存するとともに、展覧会を通じて、文化の担い手である子供や若者に届くよう、積極的に発信いたします。また、ICTなど最先端技術を積極的に活用し、当館コレクションに加え、江戸東京博物館、現代美術館のコレクションを併せた「東京都コレクション」を国内外に発信してまいります。		○収集方針、収集の新指針に基づき的確に作品を収集し、主催する展覧会等で早期の公開を図った。また、資料情報システムの充実を図り、収蔵品データの登録・公開に努めた。 ○令和3年度新規公開データ　テキストのみ2,550件、画像2,430件　公開点数35,250件（うち画像付きデータ12,050件）
	評価指標	デジタルアーカイブのアクセス件数	令和3年度　資料情報システムアクセス件数　訪問数36,924件　閲覧履歴852,840pv
4	『国内外の写真・映像に関する美術館等との連携』 蓄積した国内外のネットワークをより一層強固にしていくとともに、保有する収蔵コレクションや高い専門性を活用して、事業連携を促進するなど、国内の写真・映像文化の振興に貢献してまいります。		○メルボルン大学との協働により日本とオーストラリアを代表する現代作家のグループ展を開催し、コロナ禍の中、オンラインを活用しメルボルン大学、東京藝術大学と共催で国際シンポジウムを開催するなど国際的なネットワークの拡充に努めた。 ○当館開催により東川賞国内作家賞を受賞した「瀬戸正人」展を福島県立美術館に巡回、関連事業を含む共同事業を充実させた。
	評価指標	共同企画や巡回展の件数、国内外の専門的会議への参画などの件数	○協働企画展1、巡回展1、国際シンポジウム、映像部門によるアーカイヴ研究会の開催他
5	『障害者や子供など多様な来館者に対応した事業の推進』 障害者や子供、高齢者、さらには子育て世代 などにも対応した鑑賞の機会や参加体験型事業等を、地域のボランティアやNPO、教育機関等と連携しながら事業展開することにより、社会課題の解決に貢献するとともに、芸術文化の支え手の裾野を拡げてまいります。		○コロナ禍の学校のニーズに合わせ来館対応に加えオンラインや出前授業も実施し対応した。来館困難な学校が授業で活用するためにアニメーションのデジタル教材を開発した。 ○ワークショップ等事業では、キット郵送による自宅での写真制作（親子対象）と、作品鑑賞プログラムのオンライン実施で、様々な事情で来館が困難な方や聴覚障害者などが気軽に参加可能な機会の創出、手話付きの事業により手話母語者への情報支援を実施した。視覚障害者とのプログラムを一般団体と連携実施、ボランティアによるワークショップや対話型鑑賞会（オンライン）を実施し、外部連携を図った。
	評価指標	幅広い世代や様々な人に向けて体験的に学ぶ場を提供し、鑑賞者を育成するワークショップ等事業参加人数	参加者実績【オンライン実施事業を含む】 ○スクールプログラム：25回延べ844人○パブリックプログラム：22回延べ695人（インクルーシブ、バリアフリーのプログラムを含む）
6	『基幹的事業である展示事業等の観覧者数の向上』 展示事業は、作品収集・保存、調査研究、教育普及事業など、館の活動総体が収斂された美術館の基幹的事業であり、都民の期待が最も高い事業です。 また当館ならではの施設として美術館内の上映ホールを有しており、希少性が高く芸術的な名画の上映事業を実施しております。 基幹的事業であり主要施設を活用した、展示事業及び上映事業の年間観覧者数を数値目標とし、この達成に向けて取組を推進してまいります。		○感染症対策に万全を期し、日時指定予約の推奨を導入したうえで、展覧会事業、各種関連事業を実施した(講演会、トーク等28回延べ3,884人参加)。 ○コロナの影響により「白川義員展」「日豪現代写真展」の会期を変更して再開した。関係機関の協力により再借用を行い、オーストラリア大使館から再度助成を受けるなど、安定的な運営、館事業広報に大きな協力を得た。 ○上映事業では配給会社と連携し、ターゲット層を狙った宣伝広告を実施し、当館にふさわしい国内外の優れた映像作品を上映した。
	評価指標	年間観覧者数	当初目標値：225,000人　実績：209,004人（93%） 【内訳】展覧会195,216人　上映事業13,788人
7			
	評価指標		

総合的な所見（自己評価の総評）

○4月25日から5月31日まで臨時休館を余儀なくされたが、事前予約システムの導入や感染症予防対策を万全に期したうえで6月1日から再開した。ヴァーチャルギャラリーで展示を鑑賞できるコンテンツや作家や担当学芸員によるオンライン動画配信を行い、自宅に居ながらにして写真・映像文化の魅力に触れる機会を提供した。教育普及事業では、対面型事業を縮小する一方で、オンライン会議システムを活用した視覚障害者との鑑賞ワークショップを実施するなど多くの人への参加機会を提供した。都のガイドラインが緩和されるなどの状況を踏まえてホールやラウンジでのアーティスト・トークやスタジオでのワークショップ等の対面イベントを工夫により実現し、来館者サービス向上に努めた。
○観覧者数209,004人（当初目標値93%）にオンラインの展覧会関連の動画閲覧108,866回を考慮すると、来館者と様々な理由で直接来館ができない人々にも、写真・映像芸術の鑑賞機会を提供できた。
○入場料収入が落ち込む中、支援会員制度を着実に運営していく取り組みや補助金、協賛金等の外部資金を積極的に獲得し、収支のバランスの取れた運営ができた。上記1～6の目標に対して満足できる成果を上げることが出来たと考えるが、今後さらに充実させていきたい。

外部評価 評定結果	総括的な意見（総評）
A	・各展示の図録の論考は詳細であり充実した資料である。多くの学芸員が寄稿、講演会などを通じて研究成果を発表し、社会貢献している。 ・著名な作家の回顧展、新進作家の紹介、学術的な展示など、多方面にバランスの取れた展示があり、それぞれの展示の内容が充実している。 ・恵比寿映像祭は、3階展示室の有料化、ゲスト・キュレーターによる展示など、全体構成を一新し、目標値を上回る集客数を得た。タイムリーなテーマ「スペクタル後」を多面的な視点で読み解くための「コンセプトブック」を刊行、鑑賞のための各種教育普及プログラム実施、オンライン映画の毎日配信など、内容もたいへん充実し、事業としての幅も広がった。 ・新たに、ニコニコ美術館動画配信、デジタルサイネージ広告、ラジオCMなどが活用され、新規層の潜在来館者にアプローチした。 ・自宅で展示を楽しむための動画配信を積極的に行った。展示風景だけではなく、作家のインタビュー、アーティストトークなど33本もの番組を公開し、貴重なアーカイブにもなっている。 ・手話通訳付きトーク、インクルーシブ鑑賞ワークショップ、やさしい日本語ガイドなど、視・聴覚障害者や非日本語圏出身者向けのプログラムが実施され、あらゆる人が鑑賞体験を共有できるよう、多様性に配慮した。 ・コロナ禍という困難の中で参考目標値をほぼ達成している。休館を余儀なくしていた時期もオンラインなどで広報に努めた。また、チケット日時指定予約システムの導入により、感染予防対策と利便性向上が図られた。
A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である	

【資料3】

【東京都現代美術館】

令和3年度目標達成シート

基本方針	令和3年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
文化の創造と魅力あるメッセージの発信 ①現代美術の国内外への発信 ②現代美術の保存と継承（コレクションの充実・保全・公開） ③広範な関心への応答	1	■調査研究／展示／教育普及等、貴重な美術資料を様々な形で提供するとともに、魅力溢れる最先端の表現を国内外へ広く発信する。 ■国内外の人々、特に次代の芸術文化の担い手である子供や青少年に、日本発の「現代」と「美術」の魅力をより積極的かつ効果的に発信する。	■新型コロナ対応で疲弊してきた日常の中で、表現や美術を通じて共感や共鳴を求める幅広い年齢層へ届く事業を実施できた。 ■現代美術を核とした音楽、映像、テクノロジー、特撮、建築等、分野や領域を拡大する展覧会やプログラムを実施し、現代美術館としての存在意義をアピールできた。 ■コロナ禍においても各プログラムを通して、国際的な組織、関係者、作家等のネットワーク強化を推進することができた。
	評価指標	年間観覧者数	年間観覧者数　437,908人（コレクション展　80,583人、企画展357,325人）
	2	■収蔵作品・資料等の充実・活用を通じて、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、新たな視点で日本の美術のコンテクストを形成する。 ■専門家との協働や最新の調査研究の成果に基づいた着実な管理（保存・修復・展示）によって、貴重な作品を未来へ伝える。	■企画展と連携したテーマや、収蔵の歴史を紐解くテーマを設定し、コレクションの工夫や可能性、魅力を発信するようなコレクション展を開催した。 ■専門家と協働しながら計画的に大型彫刻を含め７点の修復を進めることができた。 ■コロナ禍で計画変更が多数ある中、35件・146点の作品貸出を実施した。デジタルアーカイヴ公開を実施した。
	評価指標	コレクション（収蔵品）のデジタル撮影点数　／　新収蔵作品のデジタルデータの入力件数	収蔵作品のデジタル撮影　11点・133カット／新収蔵作品のデジタル入力　41件
現代美術の普及と次世代の担い手を育む ④優れた作品等の鑑賞機会の提供 ⑤現代美術の普及と子供達の育成 ⑥新進・若手作家をはじめとする文化の担い手への支援	3	■現代社会の広範な関心に対応し、東京の社会課題に美術をとおして向き合う場となることを目指す。 ■最先端の情報の収集と堅実な調査・研究に基づいたプログラムの提供により、来館者に「知る喜び」を伝える。 ■ﾃﾞｻﾞｲﾝ、ﾌｧｯｼｮﾝ、建築、音楽、映像、ｱﾆﾒｰｼｮﾝなど、他ジャンルを幅広く取り上げることで多様な関心に応える。 ■上記事業全体をとおして、財団内連携によるクリエイティブ・ウェル事業に参画する。	■MOTアニュアル展、久保田成子展を通して、歴史背景や現代社会の課題等と向き合う展示を実施し考察の場を創出できた。久保田成子展「第32回倫雅美術奨励賞」（企画及び図録論文）を受賞。 ■ライゾマティクス展、ユージーン展では最新・最先端技術による大規模インスタレーションを創出し、鮮烈な体験の場を創出した。 ■マンダース展、横尾展等国内外の現代美術を代表する作家個展を開催すると共に、マークレー展、井上展、吉阪展等を通して現代音楽、特撮、建築、その他民間企業と協働しながらマンガや書籍等の分野横断的な企画を実施し多様な関心に応えた。 ■これらの取組等を通じ、あらゆる人が芸術文化を享受できるよう環境整備に取り組むクリエイティブ・ウェル事業を推進した。
	評価指標	クリエイティブ・ウェルの事業件数、参加者数	手話通訳の導入5件、参加者数21名／特に社会的課題に取り組んだ作家5人
	4	■先端的表現／展示手法による国内外の現代美術を紹介し、ファッション、映像等、様々なジャンルを幅広く取り上げることで新たな客層を獲得する。 ■収蔵作品、資料等の充実・活用を通じて、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、優れた鑑賞機会を提供する。	■約5,500点の収蔵作品を中心に4期のコレクション展を開催。新型コロナ対応で臨時休館した時期も問合せが絶えることはなかった。 ■久保田展と連携したフルクサスの展示等、現代美術史を再考する機会を創出すると共に、作品保存をテーマにしたコーナー展等、新たな視点にも取り組む機会をもつことができた。
	評価指標	コレクション展示の出品・公開点数	コレクション展における収蔵作品公開　476点
あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現 ⑦ アクセシビリティの整備 ⑧ 地域連携の強化	5	■収蔵作家が現存する特性を生かし、体験型展示や分かりやすい解説を用いて、創造力・鑑賞力を高める教育普及活動を展開する。 ■アーティストによるワークショップや新たな情報デバイスの活用など、様々な体験をとおして、現代美術の普及に取り組む。 ■学校との連携や高齢者対象、障害があっても参加することができるプログラムなど、様々な年齢や興味に応じたきめ細やかな事業を展開する。	■現代作家によるワークショップや学校訪問事業や企画展の関連トーク等を通じ、創造力を刺激し可能性を拡げる活動を実施した。 ■コロナ禍においても継続可能な遠隔プログラムや教材の貸出し等を通じて、現代美術の体験の多角性を高めることに努めた。 ■手話トークの実施や触察ツールの開発等、多様な人々が能動的に現代美術の現場へ参加できるプログラムや計画を心掛けた。
	評価指標	教育普及プログラムの参加者数及び満足度	教育プログラム参加者　3,344人／満足度　平均95.6%
	6	■才能ある芸術家の発掘・支援のため、新しい創造活動や作品発表の機会提供や作品の収蔵などを行う。 ■文化の担い手の裾野を広げる役割を果たすために、学校をはじめ、国内外機関、地域企業やNPOなど様々な人々とのネットワークを形成する。	■コレクション展においては、Chim↑Pomや三宅沙織等、多様な活動を行う若手作家の新規収蔵作品の紹介等を通じて新たな来館者層を獲得した。 ■企画展においては、MOTアニュアル展、ユージーン展等若手作家の創作発表の場を創出した。 ■「アーティストの一日学校訪問」等の事業を通じて、将来的な文化・芸術の担い手の裾野を拡げ、多角的な視野へと導く事業を展開した。
	評価指標	若手作家への支援数（作品公開・展示・収集等）	若手作家への支援　作品公開78点（22+56）／展覧会における作家10名（6+4）／収集５名・12点
	7	■設備面のみならず、手話通訳の導入や普及プログラムの提供などソフト面でのバリアフリーを促進する。 ■総合的な視点から、多言語化を含め、誰もが現代美術を享受できる場を作る。 ■おむつ替えスペースの設置やベビーカーの無料貸出等、小さなお子様連れでも安心して美術館での鑑賞を楽しむことができる環境を整える。 ■スマートフォンやタブレット端末を用いて、インターネット経由での展覧会の鑑賞の他、より現代美術に親しみやすい環境を整える。	■教育普及事業における手話通訳付きの講座や触察ツールの開発、バリアフリー対策の今後を見据えた研究論文の紀要への掲載、また事務棟の出入口の自動ドア化など、ソフト面、ハード面でのバリアフリー化を順次進めている。 ■手話の可能な受付案内スタッフの配置、レストランでの離乳食メニューの提供、ミュージアムショップでの多くの児童向け書籍の販売等、全館を上げて誰もが楽しめる場の提供に取り組んでいる。　(*) オンラインチケットが小学生・未就学児区分なし
	評価指標	バリアフリーに関する取り組みの件数　・アンケート、満足度調査による満足度　・未就学児の割合	手話通訳の導入5件（再掲）／展覧会満足度90%（平均）／小学生以下(*)の割合3.2%
	8	■近隣施設や商店街等と連携し、地域における街づくりの核となることで、伝統と現代が共存・融合する都市・東京のイメージをアピールする。 ■地域との密なコミュニケーションを図り、誰もが文化に触れられ、参加できる親しみやすい施設づくりを目指す。 ■地域と連携した事業を積極的に実施し、地域経済の活性化と観光拠点としての役割を果たす。	■共催事業「東京アートブックフェア」と同時期に地域型一般プロジェクト「本と川と街」の開催をゆるやかに連動させ、将来的に事業が地域へ浸透する基盤をつくった。 ■コロナ禍における対応策を確認しながら、近隣の学校団体見学を受入れ、来年度以降につなぐ活動を実施した。
	評価指標	地域連携活動の実践	地域活動との連携（地元商店街主催コンクールの審査協力、地域型プロジェクト参加者への割引入場の提供等）

	H30年度実施値	H31年度実施値	R2年度実施値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実施値
観覧者数（人）	35,172	528,178	437,375	(430,000)	430,000 (☆)	437,908
自主事業参加者数	9,979	76,796	48,257		40,000	33,407
若手作家の支援	14	30	11			10
協賛金の獲得金額	250,000	2,273,000	17,733,000			10,235,000
ＨＰのアクセス数	1,145,809	6,295,466	6,794,966			6,700,574

※R３年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段<☆>が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

総合的な所見（自己評価の総評）

令和3年度も、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けることとなった。都の方針により、4月下旬から5月にかけて全館臨時休館を余儀なくされたほか、さらにコレクション展は1月から3月に臨時休室とされた。しかし、そうした状況ではあるが、例えば、ライゾマティクス展というバーチャルな空間と連結する展覧会と、マーク・マンダース展という作品の物質性の重要さを再確認する展覧会を組み合わせて同時に開催するなど、コロナ禍というマイナスの与条件の中においても多くのチャレンジを行った。また、2020東京大会に合わせて開催した横尾忠則展や、新進気鋭のアーティストを紹介したユージーン・スタジオ展など、東京都現代美術館の特徴を活かした事業を展開し、若い来館者へのアピールも積極的に行った。結果として、コロナ禍の影響にもかかわらず、コレクション展と企画展の合計観覧者数が当初目標を上回る実績を上げたことは、館の活動に対する高い評価の結果であると認識している。教育普及事業においても、バリアフリー対策に継続して取り組み、手話通訳付きの講座や触察ツールの開発等も行った。今後は、長期的には、アフターコロナを見据えつつ、海外発信の強化を行い、文化都市としての東京の国際的な認知度を高めるため、人材の育成と国際的な視点での事業展開を図っていきたい。
なお、2022年3月、東京都は2030年度までの重点的施策を示した「東京文化戦略2030」を策定した。東京都現代美術館はフロントランナーとして、その目標達成に向け一丸となって取り組んでいく。

外部評価 評定結果	総括的な意見（総評）
A A：目標を十分に達成し、成果を上げている B：目標を概ね達成している C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である	○令和3年度も、前年度に続いてコロナの影響を受け、大きな制限がかかったが、最大限の努力とチャレンジを通じ、東京都現代美術館ならではの展覧会を開催した。 ○全館臨時休館などがある中でも、コレクション展と企画展の合計観覧者数が当初目標を上回ったことは大きな成果であるとともに、美術作品のリアルな鑑賞体験の重要さを再認識させられる結果でもあった。 ○展覧会事業は個々の企画内容もさることながら、期ごとの展覧会の組み合わせや構成が素晴らしく、東京都現代美術館の独自性が際立っていた。 ○企画展関連事業や教育普及活動においても、オンラインをはじめとする新たな事業を展開されるなど、アフターコロナに向けた取り組みが整えられつつある。 ○これまで、コロナ禍においても、展覧会事業、教育普及事業、図書室の運営、広報、館の管理等、多岐に渡る業務を管理・学芸・施設が一体となった美術館全体のチームワークで乗り切ってきたが、引き続き中長期的に安定した運営を確保していくためには、組織強化に継続して取り組む必要がある。 ○地元に根付き、多くの若いファンも獲得している東京都現代美術館は、日本を代表する美術館として、充実期に入ったと感じられる。開館30周年（2025年）に向けてまた期待したい。 ○なお、1月～3月にかけて、多くの来場者が見込まれる企画展を開催する一方で、コレクション展だけを閉室したことにコロナ対策としての合理性があるのか、検証と評価を行い、説明責任を果たすべきである。

【東京都美術館】

令和3年度目標達成シート

【資料3】

基本方針

東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。

新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人々の「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。

来る開館100周年（2026年）を機に、芸術文化による社会包摂と心身の健康と幸福を目指し、新しい美術館モデルを切り拓いていきます。

そのため、美術館の運営にあたって4つの役割を掲げます。

1 「世界と日本の名品に出会える美術館」

2 「伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館」

3 「人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館」

4 「芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館」

この基本方針のもとに4つの事業を展開します。

① 展覧会事業＝特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する。

② 公募展事業＝公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する。

③ アート・コミュニケーション事業＝アート・コミュニティ形成による新たな可能性の探求する。

④ アメニティ事業＝アートラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる。

	H30年度実績値	H31年度実績値	R2年度実績値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実績値
特別展観覧者数（人）	1,510,905	1,038,920	136,913	＜850,000＞	585,675 〈☆496,650〉	573,731
自主企画展観覧者数（人）	104,418	51,806	4,535		40400 〈☆－〉	34,286
公募展示室割当時稼働率	100.0	100.0	100.0	＜100.0＞	＜100.0＞ ＜☆－＞	100.0%(割当時)

※R3年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段〈☆〉が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

令和3年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

1

令和3年度達成目標

「アートへの入口」として「創造と共生の場」を形成する。
当指定管理期間初年の令和3年度は、感染症予防対策及び東京2020年大会文化プログラム推進等の社会情勢に適切に対応しつつ、グローバルかつ計画的視点を持って事業を着実に実施していく。館活動全体で多言語対応、ダイバーシティ対応などホスピタリティの向上に努めるとともに多角的な広報運営を推進する。また、来館者の安全安心を最優先に万全の施設管理を行いつつ、訪れる楽しさを充実させる「アメニティ事業」を展開する。さらに、アート・コミュニケーション事業を中心に、ICTを活用した事業や連携、交流に努めるとともに、子供、青少年、高齢者、障害者、外国人等が主体的に美術館活動に参加できる活動の場を拡張し、ミッションの実現に向けた取組みを推進する。

評価指標

最先端技術を活用した発信…「ICTを活用したアート・コミュニティ形成に関わるアート・コミュニケータの活動」「ICTを活用した国内外の文化施設、機関との連携と交流（オールジャパン戦略事業）」
間口を広げ、主体的に関わる仕組みづくりの見える化…「とびらプロジェクト（アート・コミュニケータ）、Museum Start あいうえの事業（青少年）の有機的なつながりと成果の報告書を作成

成果と課題

令和3年度春、COVID-19の感染拡大による緊急事態宣言が発令され、4月25日から5月31日の間は臨時休館となった。6月以降は検温、手指消毒、日時指定制による人数制限などを実施し、感染拡大防止対策を最優先しながら、慎重に美術館の運営を行った。広報においては英文ツイッターによる基本的な情報の配信に努めた。初の試みとして、渋谷公園通りギャラリーと連携した「やさしい日本語」ガイドを印刷物と音声で作成し、つながり創生財団の協力等により外国人の門戸拡大を実施した。アメニティ事業では、ショップやレストランとの緊密な情報交換と連携を行い、感染拡大の防止、安全第一の管理運営に留意した。
アート・コミュニケーション事業では、八戸市美術館（青森県）やたいけん美じゅつ場VIVA（茨城県）のアート・コミュニケーション事業担当者をオンラインでつないだオープンレクチャーや、オンラインとリアル会場を組み合わせたハイブリッドのとびらプロジェクトフォーラムを開催、参加・交流の機会を広げた。また「Museum Start あいうえの」の仕組みと実践をまとめた書籍を出版、美術館体験を通じて全ての子供たちと保護者の社会参加の入口となることを目指す理念を発信した。年間を通して、子供、障害者、外国人など多様な来館者にそれぞれ親切丁寧に対応し、ホスピタリティの向上に努めた。

2

令和3年度達成目標

「世界と日本の名品に出会える美術館である」
特別展では、「イサム・ノグチ　発見の道」を春から夏にかけて開催し、アメリカ人の母と日本人の父の下で東西の文化を融合した世界的彫刻家イサム・ノグチの名作の数々を2020オリンピック・パラリンピックの期間に東京に訪れる方々に鑑賞していただく。同展及び「ゴッホ展――響きあう魂 ヘレーネとフィンセント」「ドレスデン国立古典絵画館所蔵　フェルメールと17世紀オランダ絵画展」では、日時指定制による入場制限など感染症予防対策を万全にした上でより良い鑑賞環境の下世界的名作を味わっていただく。また令和4年度以降の展覧会の準備を着実に行う。

評価指標

年間特別展観覧者数（人）

成果と課題

日時指定制による入場制限をはじめ、感染拡大防止に努めながら適切に実施。「イサム・ノグチ　発見の道」は、リニューアル後初めてとなる館独自の企画により開催。「ゴッホ展」では、世界的評価の礎となったコレクターを軸に優品の数々を紹介した。また初めて「ジュニアガイド動画」を制作、配信した。「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」では、作品の大規模な修復過程を紹介する映像を制作し会場で上映、鑑賞理解を深める契機とした。令和4年度以降の特別展の準備を着実に進めた。

3

令和3年度達成目標

「新たな価値や可能性を見出す展覧会等を実現する」
企画展では、ユニークな経歴を持つ国内外5人の作り手による絵画、写真、彫刻、映像を紹介する「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」を2020オリンピック・パラリンピックの期間に実施する。本館企画展のテーマの一つ「アーツ＆ケア」の下、制作を生きるよすがとした5人の作り手のひたむきな情熱と魅力を伝える。また令和4年度企画展「アーツ＆ライフ展「フィン・ユールとデンマークの椅子」」の準備を進める。「東京都コレクションでたどる〈上野〉の記録と記憶」では、東京都コレクションの積極的活用を図り、都民に分かりやすく紹介する。

評価指標

企画展とコレクション展の入場者数（人）

成果と課題

企画展「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」では、「生きる糧」としての芸術を感じられる展覧会として、様々な背景と動機をもった5人のユニークな作り手を紹介。好評を得た。また、展覧会ガイドと展示風景の動画を制作し館ウェブサイトから視聴できるようにしたほか、関連事業としてオンラインで「ダンス・ウェル」を実施し全国より参加者を得た。「東京都コレクションでたどる〈上野〉の記録と記憶」では、財団各館の所蔵品を効果的に活用。ガイドの動画を館ウェブサイトに掲載した。また、開催期間中、財団事務局で運営する「東京都コレクション収蔵品検索（ToMuCo）」サイトと連携して特集を組んだ。また、令和4年度の企画展「フィン・ユールとデンマークの椅子」の準備を着実に進めた。

4

令和3年度達成目標

「作品発表の場の提供と新たな創造性を共有する美術館である」
公募展事業では、学校教育展、公募団体展を滞りなく安全に実施する。また、令和5年度の単年度使用割当を円滑に決定する。公募展活性化事業では、「上野アーティストプロジェクト2021「Everyday Life：わたしは生まれなおしている」」、「都美セレクション グループ展 2021」を着実に実施するとともに、次年度以降の実施に向けた準備もしっかりと進める。「文化芸術体験プログラム」では公募団体と密接に連携し、外国からの来館者などが気軽に日本の文化芸術に触れる機会を提供する。

評価指標

公募展示室使用割当時稼働率（%）

成果と課題

公募展事業では、令和5年度の単年度使用割当を決定し、100%割り当ての目標を達成した。また、学校教育展・公募団体展の各主催団体には、感染防止対策の協力を要請しながら安全な施設運営を推進した。「上野アーティストプロジェクト2021 Everyday Life：わたしは生まれなおしている」では、出品作家へのインタビュー動画を会場で上映したほか、館ウェブサイトでも公開した。「文化芸術体験プログラム」では、日本盆栽協会の協力のもとに動画「盆栽をたのしむ」を制作し館ウェブサイトから広く視聴できるようにした。

5

令和3年度達成目標

「アートを介して多様なコミュニティの形成を行い、社会課題解決に取組む」
AC事業では「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」そして教育普及活動を着実に実施するとともに、新規事業「エイジフレンドリー＆ダイバーシティ事業」「オールジャパン戦略連携事業」の初年度事業について確実に推進する。前者では高齢者や障害者と文化施設をつなぐ仕組みづくりに向けて調査・研究を行い、研究会の開催を行う。後者ではICTを活用して国内外の連携機関と勉強会を開催し、社会課題に対応する先端的な事例の共有などを行う。

評価指標

「クリエイティヴ・ウェル・プロジェクト」に取り組む…「プロトタイプのプログラム開発と調査研究」を行う。

成果と課題

リアルとオンラインを併用して事業を実施。「とびらプロジェクト」のアート・コミュニケータの自主的会議は昨年度をさらに上回り過去最大回数実施され、11期アート・コミュニケータへの応募者数も、初年度を上回る過去最大の420通となった。「Museum Start あいうえの」では、約2年ぶりに休室日の学校プログラムを行い、つながり創生財団と連携した多文化共生プログラムも実施した。令和3年度から新たにスタートした「エイジフレンドリー＆ダイバーシティ事業」では、「Museum Start あいうえの」と連動し高齢者と中高生がノグチ展と映画を鑑賞した後で対話を行う異世代交流プログラム「見る旅」と、認知症の高齢者と家族とアート・コミュニケータがzoomを介して対話型鑑賞を行う「おうちでゴッホ展」を実施。参加者アンケートでも高い評価をいただき、今後の展開を期待されている。また、高齢者を対象とした社会的処方に関する調査の一環として、国立台湾博物館が自館での実践や海外事例をまとめた「博物館処方箋実践ガイドブック」を和訳しオンラインで公開した。台東区社会福祉協議会をはじめとする福祉セクターとともにアートを介した高齢者支援をテーマにした研究会を行い、今後の連携の端緒とした。

6

令和3年度達成目標

「様々な主体とのネットワークを強化しながら上野地域の文化施設の中で中核的な役割を果たす。」
上野公園周辺地域（谷中、根津、千駄木）、日暮里、台東区を含め周辺区とのネットワークを強化することにより、地域の魅力を高めることを目指す。顕在化していない地域の様々な文化資源も含め、横断的にそれらをつなぐアート・コミュニケーション事業の実施や、特別展・公募展の開催、地域連携による積極的な広報活動、「文化の杜」新構想会議及び実行委員会などを通じて、多くの入館者を迎える拠点となる美術館として、中核的役割を果たす。

評価指標

上野公園周辺地域（谷中、根津、千駄木）、日暮里、台東区を含め周辺区との連携

成果と課題

上野地域の連携では、引き続き、アート・コミュニケーション事業「Museum Start あいうえの」で上野の文化施設間の連携に努めたほか、広報においても上野商業施設との連携広報に取り組み、ゴッホ展では上野近隣各店舗との連携ポスターも展開した。令和3年度も、COVID-19の影響を受けたが、オンラインでの会議や発信などの取組みは一層進展した。

総合的な所見（自己評価の総評）

令和3年度春、COVID-19の感染拡大による緊急事態宣言が発令され、4月25日から5月31日の間は臨時休館となった。6月以降は検温、手指消毒、日指定制による人数制限などを実施し、感染拡大防止対策を最優先しながら、慎重に美術館の運営を行った。多様な来館者に親切丁寧に対応し、ホスピタリティの向上に努めた。会場に来られない人のために、「イサム・ノグチ　発見の道」では約15分のギャラリーガイド動画を制作、「ゴッホ展」では「ジュニアガイド動画」を制作、そして「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」でもガイドと展示風景の動画を制作し、オンラインで配信した。また「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」では、作品の修復過程を紹介する映像を制作し会場で上映して、鑑賞理解を深める契機とした。公募展事業では、令和5年度の単年度使用割当を決定し、100%割当ての目標を達成した。また、学校教育展・公募団体展の主催団体には、感染防止対策の協力を要請しながら安全な施設運営を推進した。「上野アーティストプロジェクト2021 Everyday Life：わたしは生まれなおしている」では、出品作家へのインタビュー動画を配信し、「東京都コレクションでたどる〈上野〉の記録と記憶」でもガイドの動画をオンラインで提供した。また、開催期間中財団事務局で運営する「東京都コレクション収蔵品検索（ToMuCo）」サイトと連携して特集を組んだ。「アート・コミュニケーション事業」の「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」ではオンラインとリアルを組み合わせて活発に活動し、プログラムを実施した。令和3年度から新たにスタートした「エイジフレンドリー＆ダイバーシティ事業」では、「Museum Start あいうえの」と連動した高齢者と中高生がノグチ展と映画を鑑賞した後で対話を行うプログラム「見る旅」と、認知症の高齢者と家族とアート・コミュニケータがZoomを介して対話型鑑賞を行う「おうちでゴッホ展」を実施した。参加者のアンケートでは高い評価をいただき、今後の展開を期待されている。アメニティ事業では、ショップやレストランとの緊密な情報交換と連携を行い、安全第一の管理運営に留意した。以上のとおり、令和3年度も引き続きCOVID-19の影響を受けたが、オンラインでの会議や発信などの取組みも一層進展した。令和4年度においては、感染拡大防止対策を適切に取りながら、社会情勢に柔軟に対応しつつ、東京都が新たに作成した「新文化戦略2030」及び財団の「改訂長期ビジョン」を適時参照しながら、確実に事業を実施していく。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

長引く新型コロナウイルス感染症の影響で、人数制限や期間短縮などを余儀なくされた令和3年度であったが、オンラインによるイベント開催や発信などICTを十分に活用して対応し、特別展では入場者目標を達成できたことを評価したい。
展覧会については、「イサム・ノグチ　発見の道」や「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」など、いずれの展覧会も学芸員の研究活動が如実に反映された学術的に高い意義を持つ企画となり、また、「ゴッホ展」「フェルメールと17世紀オランダ絵画展」のように多くの入場者が見込める展覧会であっても、内容に工夫が凝らされて高く評価される。
また、社会包摂を意識した取組みを順調に拡大しつつあり、特に認知症高齢者を対象とした「おうちでゴッホ展」の実施や、国立台湾博物館の社会的処方ガイドブックの和訳は、先駆的な取組みとして注目される。今後、美術館の社会課題解決にむけての姿勢は、東京都としても国としてもますます問われることになると思われるので、継続して事業を発展させていただきたい。
全体的に非の打ちどころのない館運営であり、職員の異動がある中で、これまでの経験と知見を職員間で共有継承し、今後も継続的に運営されていくことが望まれる。
Withコロナを許容し、その環境の中で生まれる新しいアート、一番難しい連携や繋がりを引き続き模索しながらの活動を期待する。

令和3年度目標達成シート

基本方針

1　歴史的建造物である本館の保存とその公開

2　装飾芸術に基づく新たな価値を今日の社会に活かす展覧会・各種事業の実施

3　「歴史的建造物」、「装飾芸術」、「庭園」を三本柱とする文化的都市空間の形成

4　あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現

東京都庭園美術館は、本館が昭和8年（1933）に建築されたアール・デコ様式の歴史的建造物であることから、昭和58（1983）年の設立以来、その「保存」と「活用」を運営方針としてきました。

保存の面では、開館を期に本館の修復作業に着手し、また毎年、アール・デコ様式の調査研究を兼ねた「建物公開展」を開催してきました。その成果のひとつとして、本館は平成27年（2015）に、国の重要文化財「旧朝香宮邸」に指定されています。

活用の面では、アール・デコという言葉が、「装飾芸術」（建築、デザイン、工芸、家具、美術等に表れる装飾性）を意味するフランス語に由来することから、これまで国内外の美術作品を、主として装飾芸術の観点から取り上げる展覧会を企画してきました。

平成26（2014）年の新館改築を機に、館の運営方針には、「新たな価値の創造」が加えられました。これによって庭園美術館の展覧会事業には、今日の視点で装飾芸術を創造する芸術家の作品を展示することが加わりました。

このほかに東京の文化の魅力の創造と発信に寄与するために、装飾芸術の価値を今日の社会に生かすという視点から、庭園の活用事業をはじめとして、さまざまな教育普及事業にも取り組んでいきます。

以上の経緯により、庭園美術館は、重要文化財である「旧朝香宮邸」の保存と公開を基盤に、装飾芸術の力によって、東京という都市のこれからの課題である多文化共生、環境問題などに対応し、すべての都民の心を豊かにする場となることを目指していきます。

	H30年度実績値	H31年度実績値	R2年度実績値	R3年度基準値	R3年度目標値	R3年度実績値
観覧者数（人）	173,790	145,360	100,473	〈185,000〉	124,350 〈☆98,984〉	123,886
庭園のみ入場者数（人）	64,499	57,733	49,401		61,800 〈☆43,600〉	39,110
自主事業参加者数（人）	－	－	806			1,009

※R3年度基準値は、提案書の基準値
※R3年度目標値は、上段が当初目標値、下段〈☆〉が新型コロナウイルス感染拡大による事業中止などの影響を反映させたもの

令和3年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和3年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1		旧朝香宮邸の適正な維持管理及び調査研究 ・文化財としての旧朝香宮邸本館・茶室を、緑あふれる庭園とともに適切に維持管理しつつ、歴史的沿革や建築史・美術史的特徴など調査研究を通してその価値を高めていきます。	今年度は本館大広間及び小客室のカーテンボックス補修並びに鋼製建具の安全対策工事等を実施した。いずれも文化財であることを前提に、外部専門家の助言を得つつ進めた。概要及び成果は令和3年度紀要にまとめ、広く閲覧に供することとした。また、当館の沿革や特徴を広く紹介するため、アール・デコ期の磁器花瓶と旧宮邸家具をそれぞれ購入と寄贈により収集し、コレクションの充実に努めた。
	評価指標	旧朝香宮邸関係やアール・デコ様式を中心とした装飾芸術に関するアーカイブ構築を目指した資料の収集を行い、適切な文化財維持管理や質の高い建物公開事業を行う基盤を整える。	新規収蔵作品・資料数2点（購入1点、寄贈1点）、旧蔵家具資料状態調査および修復3点実施
2		建物公開展を通し、旧朝香宮邸の価値の発信 ・旧朝香宮邸に関する調査研究の成果を反映した「建物公開展」を開催し、貴重な文化遺産に親しみつつ後世に継承するための契機とします。	令和3年度建物公開展（受託事業）として「建物公開2021　艶めくアール・デコの色彩」展を開催し、当館の歴史的沿革や文化財的価値の紹介に努めた。宮邸当時の壁紙再現や宮家旧蔵家具の展示に加え、大食堂でのテーブルセッティングほか情景再現展示を通し、親しみながら文化財としての本館建築の稀少性を学べるよう配慮した。
	評価指標	建物公開展の入場者数　満足度、ギャラリートーク回数	入場者数6,895人（一日平均530人）、満足度100%、ギャラリートーク（オンライン）配信、3Dビューイング配信
3		装飾芸術をテーマの主軸とした企画展を通し、優れた作品等の鑑賞機会の提供 ・アール・デコ様式の原点である「装飾芸術」の観点から幅広いジャンルの多様な表現を採り上げ、新たな価値の創出へと繋げます。 ・当館の空間特性を活かし、先端的表現や新たな展示手法の導入を通じて国内外の装飾芸術を魅力的なかたちで紹介します。	令和3年度企画展として「ルネ・ラリック リミックス」展、「キューガーデン　英国王室が愛した花々」展、「奇想のモード」展を開催した。いずれもアール・デコ様式の旧宮邸とホワイトキューブの新館展示室を使い分けつつ、会場構成にも創意工夫を凝らすことで、当館ならではの空間特性を活かした独自性豊かな展示を実現した。
	評価指標	庭園美術館の基本方針に基づく学芸員の独自の視点で企画した展覧会に対する専門家による展覧会評の数	館の単独自主企画である「建物公開2021　艶めくアール・デコの色彩」展、「ルネ・ラリック リミックス」展、「奇想のモード」展に係る展覧会評　52件
4		建物や庭園などの文化資源を活用した教育普及等の事業の実施 ・本館に施された装飾をテーマとしたワークショップや、庭園・茶室を活用した各種イベント等の開催を通じ、文化財の価値や意義を楽しく理解できるよう工夫します。	野外彫刻のメンテナンスを通して文化財保護の必要性を学ぶプログラムや、展覧会と連動した小学生向けのワークショップなど、本館と庭園を有機的に結び付けた各種事業を意欲的に展開した。また、季節の茶会やワークショップ「重文わかる茶会」、こども茶会の実施などを通して、年間を通じて茶室を有効活用したプログラムを実施したが、一部はコロナ禍に伴う庭園の公開休止を受けて中止とせざるを得なかった。
	評価指標	建物や展覧会鑑賞用の独自のワークシートに基づく学校連携の実施。参加したクラス数	学校連携5校（小学校1校、中学校1校、高等学校3校）、参加児童・生徒数計166人
5		ユニークな空間特性を生かし、豊かな文化的体験の場を提供 ・緑豊かな庭園の中に本館建物や茶室、レストラン、ショップが点在するユニークな環境を活かし、「美術館＝展覧会鑑賞の場」という既成概念に捉われない、多様で豊かな文化的体験の場を提供します。	コロナ禍のなかで人々が密集する事業は実施できなかったが、今後の庭園活用のシミュレーションを兼ね、東京芸術劇場との連携による「ガーデンコンサート」を実施した。
	評価指標	ガーデンコンサート、近代都市邸宅の庭園について等、庭園レクチャーを実施するなど、多様で豊かな文化的体験の場を提供していく。	ガーデンコンサート1回実施
6		庭園を活用し、地域連携事業や交流の場を提供 ・近隣他施設や組織と連携し、庭園での茶会、ワークショップ等の開催を通じて、地域連携や交流の場を提供します。	「キューガーデン　英国王室が愛した花々」展では、地域連携の一環として、隣接する国立自然教育園の指導を得て、展覧会で紹介している植物画に描かれている草花から、当館庭園で鑑賞できるものを選んで写真で紹介し好評を博した。
	評価指標	庭園を活用した地域交流事業	野外彫刻メンテナンスワークショップ1回実施、庭園観察ワークショップ（展覧会関連企画）1回実施
7		共生社会を指向する事業と施設管理 ・クリエイティブ・ウェル事業の実施や施設のバリアフリー化を通じて、様々な人々に広く鑑賞機会を提供していきます。	令和3年度より「障害のある方向けアート・コミュニケータとめぐる特別鑑賞ツアー」と「ベビーといっしょにミュージアムツアー」を本格実施し、さまざまな背景を持つ人々にも鑑賞機会を提供することに努めた。また、多文化共生プログラムの一環として、「やさしい日本語プログラム」を実施した。
	評価指標	クリエイティブ・ウェル・プロジェクトの取り組み、参加者の満足度	「障がい者鑑賞ツアー」3日間実施、「ベビーミュージアム」4日間実施、「やさしい日本語プログラム」2回実施、満足度100%
8		様々な媒体を通し、美術館活動を国内外に発信 ・アール・デコの装飾が良好に保たれた、世界的にも貴重な建造物である「旧朝香宮邸」を美術館とするユニークな特性を活かした当館ならではの取り組みを、様々な媒体を通して広く国内外に発信します。	各展覧会ごとに担当者が展示解説をする映像コンテンツを作成し、当館HPを通じて配信した。また、「奇想のモード」展ではコロナ禍により実現できなかったアーティストトークイベントに代わり、映像コンテンツのかたちでアーティストトークの動画配信を行った。さらに、一部の展覧会では展示風景を最新の4K3Dスキャナー「Matterport（マーターポート）」を使用した立体画像として撮影し、当館HP上において無償で公開した。
	評価指標	オンラインで展覧会会場を記録した動画等独自コンテンツの発信	建物公開展1本、企画展9本（うち6本は奇想展アーティストトーク）、茶室紹介動画1本をそれぞれ配信

総合的な所見（自己評価の総評）

東京都庭園美術館は、「東京都庭園美術館条例」（令和2年3月31日公布）に基づく公の施設として、令和3年度より新たなスタートを切った。同時に、長年当館の管理運営を担ってきた公益財団法人東京都歴史文化財団が改めて指定管理者に選定され、これまで培った文化財建築の保存活用に関する知識と経験を発揮しつつ、引き続き充実した鑑賞体験の提供と安全・安心で快適な環境創りを心がけた。指定管理者となるにあたり、当館ではこれまで運営の柱としてきた建物の保存管理と展覧会の開催に加え、さまざまな社会的課題を抱える方々にも広く美術鑑賞の楽しみを提供することを新たな使命として掲げた。令和3年度は障害のある方や乳幼児と暮らす家族を対象とした鑑賞ツアーの本格実施、多文化共生プロジェクトの一環としての「やさしい日本語で美術館を楽しむプログラム」、茶室を活用した親子で参加できるワークショップ「こども茶会」など、来年開館40周年を迎える当館としても初めてとなる試みに意欲的に挑戦した一年となった。また、年度内に実施した計5本の展覧会も、事前予約制の導入や鑑賞マナーの徹底など、引き続くコロナ禍の各種制約のなかでの開催となったが、来館者の理解と協力を得つつ実現することができた。どの展覧会も当館のユニークな環境特性を活かし、それぞれに創意工夫を凝らした独自性の高い内容を提供できたと自負している。さまざまな映像コンテンツの配信にも積極的に取り組み、さまざまな事情により来館しての鑑賞が難しい方々等へも展示を楽しんでいただけるよう配慮した。（牟田）

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

いろいろすばらしい取り組みをしている。とくに、ふだん美術館に来ずらい方々に対し、休館日を利用して来る機会を設けたことが良かった。広報的にはSNSの活用が今後も肝になるだろう。展覧会のラインナップも良かった。ただ現代美術がなかったのは少し淋しい。広報物など、デザインで若い人を引き付けた点も良かった。いわゆるインスタ映えについては、来館者が発信したくなるような仕掛けも必要。全般的には美術館の特性を十二分に活かした活動だった。デザイン性や生活の豊かさを求めるニーズに合致していたのではないか。また重点目標にあげられている共生社会を指向する事業と施設管理については目標を達成しているし、今後も継続を望む。展覧会をはじめとして高水準を保っていくのは簡単なことではない。教育普及については、スタッフの人数を充実させてほしい。コロナ禍についてはネガティブなことばかりでなく、オンライン発信などプラスの面もあったと思う。ただ、それにつれて業務がプラスされていくし、美術館はただ展覧会をしていればいいという時代ではなく、美術や文化の拠点となる場所なので、それも含めてスタッフの充実を考慮してほしい。